

氏名 大久保 理紗
学位の種類 博士(音楽)
学位記番号 甲第28号
学位授与年月日 令和2年3月23日
論文題目 フランツ・リストの《幻想交響曲》ピアノ・スコア研究—演奏者の視点から見たリストの編曲技法—

学位論文等審査委員

<リサイタル審査>

主査	准教授	野原	みどり
副査	教授	上野	真
副査	教授	阿部	裕之

<論文審査>

主査	准教授	野原	みどり
副査	教授	上野	真
副査	講師	池上	健一郎

論文要旨

本論は、フランツ・リスト Franz Liszt (1811~1886) が編曲を行ったヘクトル・ベルリオーズ Hector Berlioz (1803~1869) の《幻想交響曲》ピアノ・スコアを対象として、演奏者の視点からその独自性の一端を明らかにし、リストの編曲技法に新たな光を当てていくという試みである。

本論は4章から構成される。

第1章では、リストの編曲家としての活動に焦点を当て、その生涯を概観した。

第2章では、リストの編曲における名称について、特に「アレンジメント」「トランスクリプション」「ピアノ・スコア」に着目し、19世紀の音楽書とリストの書簡を読み解くことで、改めて各概念が何を指すかを考察した。先行研究で指摘されるように、これまでのリスト研究においては、「アレンジメント」という包括的な概念の中に、厳密な「トランスクリプション」と自由な「パラフレーズ」が存在する、というアラン・ウォーカー Alan Walker の説が一般的に受け入れられてきた。しかし本論によって、リスト自身が「トランスクリプション」という語をかなり広い意味で使用していたと考えられることが明らかとなった。それに加えて、リストが提唱した「ピアノ・スコア」に関して、19世紀に盛んに行われていた「Clavier-Auszug」とは明確に区別されるべきものであったことを再確認した。

第3章では、ベルリオーズとリスト、それぞれの《幻想交響曲》の成立について、歴史的資料をもとに概観し、その後リストのピアノ・スコアの出版史を整理した。

第4章では、ベルリオーズの自筆譜とリストのピアノ・スコアを演奏家としての視点から比較考察することによって、このピアノ・スコアにみられるリストの編曲技法の独自性を浮き彫りにした。ベルリオーズは自らのオーケストレーションに強いこだわりを持っていたが、そのような独自の管弦楽の響きを再現するため、リストは発想標語を楽譜の随所に記し、演奏者の意識をそこへ向けるよう促していた。

また、リストの編曲技法について、原曲の管弦楽法の「再現」のための工夫、響きの面での配慮、ヴィルトゥオーソ的な技法による演奏効果、物理的問題への対処、リストによる音楽的な解釈、という5つの観点から分析した。リストのピアノ・スコアに対する基本的な姿勢は、原曲を「神聖なテキスト」とみなして厳正に編曲を行うことであったが、その一方で、彼はピアノにおける「演奏可能性」のための現実的な解決策を模索していた。ここでは、リストがピアニストとしての合理的な配慮を以て運指の問題に対処しつつ、時には独自の音楽的アイディアも取り込みながら、管弦楽曲の音響的、音楽的特性を可能な限り再現しようとしていたことが明らかになった。

さらにこの章では、シューマンの評論にみられるリストのピアノ・スコア評を手掛かりに、筆者のピアニストとしての知見を交えながら、《幻想交響曲》ピアノ・スコア演奏論を展開した。

この作品を演奏する者に求められることは、オーケストラ曲の色彩の豊かさや各声部の書き分け、響きの奥行きなど、その音楽的な特性をピアノ演奏の中に追求するという姿勢であろう。これを実現するために、ピアニストはさまざまなタッチやペダリングを模索し、ときには楽譜に書かれている指示に背くことすら必要とされるかもしれない。ピアニストが鍵盤上で様々な探求を行い、

そしてこのピアノ・スコアの持つ多くの演奏上の困難を乗り越えることによって、ピアノ演奏の新たな可能性が拓かれるのである。

リストによる《幻想交響曲》ピアノ・スコアは、ピアニストにとってピアノ演奏のさらなる可能性と表現を突き詰めるよう促すひとつの芸術作品であるとともに、ベルリオーズの《幻想交響曲》の初期のアイデアを伝える役割を担っているという点において、貴重な歴史的資料ともなり得るものである。

審査結果の要旨

<リサイタル審査>

2018年12月10日（月）18時より本学講堂において、博士学位申請リサイタルが実施された。プログラムは以下の通り。

プログラム

- | | |
|---|--|
| 1 | J. S. バッハ/E. ペトリ
カンタータ《楽しき狩りこそ我が悦び》BWV208 より 〈羊は安らかに草を食み〉 |
| 2 | P. I. チャイコフスキー/M. プレトニョフ
演奏会用組曲《くるみ割り人形》 |
| 3 | H. ベルリオーズ/F. リスト
幻想交響曲 |

彼女の博士論文テーマの題材であるリスト編曲によるベルリオーズの幻想曲をメインに据え、全て編曲もので構成された意欲的なリサイタルであった。ピアノのために書かれた作品よりも、オーケストラのための作品をピアノ1台で演奏する難しさは、ただ楽譜に記してある事を音にするという意味で、最高に難しい表現の1つであると言える。

1曲目のバッハ/ペトリのカンタータは穏やかで静かな中に宗教的な悦びを感じさせる佳品であるが、時々真面目な音色が窺えるも伸びやかな美しい演奏であった。

続くプレトニョフ編曲のチャイコフスキーのくるみ割り人形は、ピアノ1台で表現するにはかなり無理のある超絶技巧作品であるが、果敢に弾ききったことは賞賛に値すると言える。

休憩を挟み後半、演奏に50分を要する幻想交響曲は、その難易度から演奏される機会が少なく、非常に体力と気力を必要とする作品であるが、堂々たる演奏であった。しかしこれもくるみ割り人形同様、あるいはそれ以上に超絶技巧の極みであるためなかなか表現が難しい。そのため部分的には表層的な感も否めず、より深い解釈が望まれるところもあった。そしてプログラムノートにおいては、もう一步踏み込んだ本人の言葉や研究の成果を記述して欲しかった。

しかしながら、難曲揃いのプログラムに挑戦し、全編を弾き通したことは十分に評価できることであり、その意欲をもって更に研鑽と経験を積んでいくであろうことを期待し、審査員全員一致で合格とした。

<論文審査>

審査の方法

2020年2月14日（金）の13時から行われた公開発表会では、受審者がスライドと配布資料を用いて約30分にわたって博士論文の概要と主な研究成果について説明した後、約10分間、会場との質疑応答を行った。続いて、約20分にわたって審査員3名による論文審査および関連分野についての口述試験が行われた。最後に、本人退席のうえで審査員による審議および合否判定がなされた。

審査の内容

本論文は、フランツ・リスト（1811～1886）によるベルリオーズ《幻想交響曲》のピアノ編曲を対象とし、原曲との比較を通じてリストによる編曲技法の特徴や理念を明らかにしたうえで、その適切な演奏法について考察するものである。

第1章では、リストの生涯が、編曲家としての活動に力点を置きながら略述される。リストの音楽家としてのキャリアは、大きくパリでの活動初期、ヴィルトゥオーソ時代、ヴァイマル時代、ローマ時代、晩年という5つの時期に分けられるが、ここではそれぞれの時期に成立した主な編曲作品とその傾向が簡潔にまとめられている。

生涯にわたって編曲に取り組む中で、リストは編曲作品に対してさまざまな名称を与えている。第2章では、その中から特に「アレンジメント」、「トランスクリプション」、「ピアノ・スコア」という三つの概念について詳しく論じられる。現在のリスト研究では、「アレンジメント」の中に原曲に忠実な「トランスクリプション」と自由度の高い「パラフレーズ」が含まれるという見方が主流である。しかし著者は、リストの書簡や作品目録に加えて、当時の音楽事典における記述も参照しながら各概念を再検討し、リストが、これまでの定説よりも広い意味で「トランスクリプション」を理解していた可能性が高いことを明らかにしている。また、《幻想交響曲》の編曲に対して初めて用いた「ピアノ・スコア Partition de Piano」を、リストが「神聖なテキストの翻訳」になぞらえて特別視していたこと、さらにそれが当時一般的に用いられていた「(管弦楽曲の) ピアノ編曲 Clavier-Auszug」とも明確に区別されるべきであることも確認されている。リストにおける編曲カテゴリという、これまで踏み込んで論じられることの少なかった厄介な問題に正面から取り組み、新たな知見をも導き出しているという点で、本章の内容は高く評価されて然るべきである。

続く第3章で、ベルリオーズの《幻想交響曲》成立史と、リストによる編曲版の出版史が明快にまとめられた後、第4章でリストの《幻想交響曲》ピアノ・スコアが詳しく分析される。本章を特に興味深いものにしてしているのが、演奏者の視点からの考察である。著者は、ベルリオーズの原曲にある音を全て記譜したピアノ譜を独自に作成し、それを実際に試奏しながら、リストが《幻想交響曲》をピアノ1台での演奏に耐えうるようにするべく、音楽的、あるいは身体的な面でどのような工夫や配慮、場合によっては妥協を行ったのかを、多くの譜例を挙げながら検証してゆく。その結果、リストが「原曲に忠実な編曲」という理念を掲げながらも、特に運指や手のポジション、腕の角度といった身体的問題には現実的に対処し、時としてピアノ曲としての効果を優先させる判断を下しているさまが明らかになった。ピアニストでもある著者ならではのこうした指摘は、説得力に満ちてい

る。

さらに、著者は第4章の最後で、1835年に発表されたシューマンによる《幻想交響曲》の評論(1835年)を拠り所にしたが、ピアノ・スコアの適切な演奏法についての考察を進める。その中で、原曲の本質的な特徴ともいえる音色の多様性を実現するために、タッチとペダリングを重視すべきであると指摘する。さらに、リストのピアノ・スコアには、交響曲の忠実な再現を目指す編曲家としての理想と、演奏可能な楽譜を作らざるを得ないというピアニストとしての現実との両面が見られるとしたうえで、それによって生じる「ひずみ」にどう対処するかが演奏者にとって肝要であると説く。ただ、その「ひずみ」は必ずしも編曲の弱点や欠陥ではなく、むしろ演奏者に楽曲に対する主体的な関与を要求し、演奏表現をさらに突き詰めるよう促すものであるとする。リストがベルリオーズの原曲に対してそうしたように、演奏者にも時としてリストの指示に反するような大胆さが必要であるとする著者の見解は、今後《幻想交響曲》のピアノ・スコアに取り組む者にとってきわめて示唆的である。

本論文は、これまで十分に論じられてきたとは言い難いリストの編曲家としての側面に光を当て、いくつかの重要な知見を導き出している点で高く評価することができる。特に第2章と第4章の内容は、今後リストのピアノ編曲に取り組む演奏家にとって有益であるばかりでなく、リスト研究にも貢献しうるものである。リストが後に着手したベートーヴェンの全交響曲の編曲との関連性も含め、リストの編曲史における《幻想交響曲》ピアノ・スコアの意義にまで考察が及べば、論文としてさらに説得力が増しただろうが、それについては受審者の今後のさらなる研究に期待することとしよう。予備審査の際に指摘された細かい問題点も全てクリアされているため、審査員満場一致で合格と判定された。